みつめる 少年事件 6

SOS出せるのか検証を

川崎市子ども夢パーク所長
西野 博之(にしの ひろゆき) さん 55

子どもはどこでSOSを発信するのか。スクールカウンセラーに「助けて」と言う。児童相談所に自ら出向く。そんなケースはまれだろう。だから、社会が気づかないといけない。大人が異変に気づける仕組みがないといけない。

私たちが運営する子ども夢パーク(高津区)には、不登校の子どもが通う「フリースペース」や、子どもたちがやってみたいことに何でも挑戦できる「プレーパーク」(冒険遊び場)がある。子どもたちは木登りや泥遊び、火おこし、工作をして遊ぶ。

スタッフが一緒に過ごすなかで、子どもの「サイン」に気づくことがある。私たちは「発見する相談」と呼んでいるが、たき火を囲んでマシュマロを焼いている時にひどくおなかをすかせていたり、同じ服ばかりを着ていたり。日が暮れても帰ろうとしない子もいる。虐待やいじめを受けるなどした子どもは「僕の話を聞いて」「私を見て」とはなかなか言い出せないが、全身でSOSを出しているはずだ。

スタッフに暴言を吐き、物を壊すのは「試し行動」。かまってほしいのだ。川崎の中1殺害事件でも、加害者の少年たちには「試し行動」に関わり続けてくれる大人がいなかったのではないかと思う。

少年たちを加害者にしてしまった社会、被害者の少年のSOSに気づけなかった社会、そしてどんなところで子どもはSOSを出す、出せるのか――を検証することが必要だ。(聞き手・樽田直樹)

1960年、東京都生まれ。91年に川崎市高津区で「フリースペースたまりば」(2003年にNPO法人化)を設立し、不登校や引きこもりなどの子どもを支援してきた。06年、公設民営の市子ども夢パークの所長に就任した。中1殺害事件を受けて市が設置した外部有識者会議の専門委員も務めている。